

陳 述 書

2023年10月4日

福岡高等裁判所 御中

住所 福岡市

氏名 吉良文江

私は吉良文江と申します。福岡市城南区に住む主婦です。

福島原発事故があった時は、私の仲間の福岡市議会議員選挙の真ただ中でした。選挙終了後、政治とは何か、生活とは何かを考えさせられました。福島を自分の目で見て考えようと、2012年11月に福島県田村市と、福島市の中通りを訪れました。先に福島から福岡に避難してきていた人に相談して、福島を案内してくれる人を紹介してもらいました。

田村で会った人は、障がい者を支援する NPO のスタッフでした。福島原発事故が起こった時、施設利用者の人たちを帰せる人は帰し、他の人は一緒に避難をしました。しかし、避難所で過ごすには不便すぎるのでホテルに避難したそうです。その後、一時避難の後、NPO の人たちは近辺の放射線の測定を始めました。他にも、たくさんの人が野菜など大丈夫だろうかと検査しにやってきました。その事務所の近くに山がありました。原発事故があった時、その山の木々はすべて葉を落とし、翌年には木々に大きな葉っぱ、肉ぶとの葉っぱなど、いつもと違う形の葉っぱができていたと話してくれました。

福島の中通りを案内してくれた人は廃炉に向けての活動をしていた人で、原発事故が起こった翌日に大きな集会を予定していたそうで、「遅かった」と悔やんでいました。また、一番の後悔は、断水で人々が給水車の水を待っている時に放射性プルームが来て雨が降り出し、雨の中で給水を受ける間にたくさんの人たちが被曝したということでした。

中通りでは、小学校の通学路や放射能に汚染されやすい場所、がれきの処理をするのに防護服やマスクもせずに機械で粉塵を上げている人たち、家の庭にためられたフレコンバッグを見ました。その家の住人は、いつ持っていつてくれるのだろうか、不安でたまらないと話していました。それらの場所を線量計で測りながら案内してもらいました。

避難については、人々に逃げろと呼びかけましたが、自分は老いた父親が施設にいて、逃げられる状況ではなく、逃げられなかったと話してくれました。

中学生の子を持つお母さんから話を聞くこともできました。中通りには阿武隈川が流れているのですが、その土手は人々の散歩道でもあり、中学校のマラソンコースでした。しかし、その土手の道の端に看板が立っていて、「ここから下は危険なので中に入ってはいけません」と書かれてあり

ました。放射線量が高かったからです。お母さんは中学校にこの土手のマラソンコースでの練習は止めてくれとお願いしました。しかし中学校は「土手で走らない子はグラウンドを走るようにしています。そこで練習して下さい」と言われました。お母さんは、こんなに放射線量が高いのとは思いましたが、子どもが友だちと一緒に土手を走ると言うのであきらめました。でも、中学校に対する怒りはおさまらないようでした。

その 11 年前と今で、状況は変わっているでしょうか。壊れた原子炉建屋の処理や溶け落ちたデブリの回収は未だにできていませんし、決まった廃炉処理の工程もほとんど進んでいません。

福島第一原発事故で福岡県に避難してきた人々の中には、関東からの人もたくさんいました。その中に千葉からの方がいました。彼女の避難の理由は、子どもの鼻血でした。近所の子どもたちの多くが事故前に比べ多くの量の鼻血を出していたそうです。それでここに居ては危ないと、福岡に越してきたのです。千葉は福島第一原発から 100 キロメートル圏内のところですが、一方、福岡市は玄海原発から 50 キロ圏内です。玄海原発で事故が起きて放射能が西風に乘れば、福岡も大きな被害となり、さらに本州まで被害は及ぶでしょう。

原発は維持、管理にとっても手が掛かります。老朽化の問題も加わります。核のゴミの処理はいまだ解決策も見出されていません。さらに大きな問題は汚染水の海洋放出です。壊れた原子炉や燃料デブリに触れた水を海洋に流すのは許されないことです。このことはすべての原発に関わる大きな問題です。

そして今、原発はなくても電気は足りています。この状況で玄海原発が稼働することは反対です。避難計画も国や県の指示待ちで、実効性があるものとは思われません。玄海原発の配管ひび割れによる放射能漏れや度重なる火災事故など九州電力の対策や説明に十分納得できません。

子や孫やずっと未来の世代に負の遺産を残したくありません。

再び事故が起こったら取り返しがつきません。すぐに原発を廃止してください。

よろしく願いいたします。